

# 青さぎ牧場



ヘブサ・F・ブリンズミード作  
越智道雄 訳

---

# 青さぎ牧場

---

ヘブサ・F・ブリンズミード 作

越智道雄 訳



山房

ヘブサ・フェイ・プリンスミード 作  
アネット・マッカーサー＝オンスロー さし絵  
青さぎ牧場

---

定価 1.650円



---

訳者 越智道雄  
発行人 坂本起一

---

1976年 8月20日 第一刷  
1983年 4月1日 第三刷

---

本文印刷 内外印刷株式会社  
オフセット印刷 株式会社集美堂  
製本 富士製本株式会社

---

発行所 富山房  
東京都千代田区神田神保町1の3 郵便番号101  
電話東京(03)291-2171~7 振替東京 5-54529

---

© by Michio Ochi, Printed in Japan, 1976.

著丁・乱丁はおとりかえいたします

TISBN 4-572-00425-0

## 感謝の言葉

※本文中に出てくる、『ラビンドラナート・タゴールの詩および戯曲集』中の「庭師」の詩行は、ラビンドラナート・タゴール卿遺産管理委員会およびロンドンのマクミラン社の寛大な許可を得て、引用したものである。

※以下の歌詞は、ペパマー楽符会社一九六三年版權所有、その許可を得て使用。

庭木戸か板壁いたか壁につばさ広げて打ちつけられ、

尾羽打ちからしたふくろうの子のように、

わたしは一生らく印を押おされて生きるだろう。

ヨルダンのこちら側に眞実はなかった。

〔一八〇ページ〕

古い上着をぬぎ、シャツを腕うでまくりしたまえ  
きみの人生は険けわしい旅路だ。

〔三七七ページ〕

目次

XII	XI	X	IX	VIII	VII	VI	V	IV	III	II	I
はだの色	ギービン	グレン、新しい仲間たち	牛の水浴び場	ダステイのむかし話	クレム	ふしぎな鳥、そしてペリー	ローズ	ブンドウーラの家	出 発	ダステイ	父の死と、祖父との出会い
163	152	133	119	106	95	79	68	47	29	23	3

XXIV XXIII XXII XXI XX XIX XVIII XVII XVI XV XIV XIII

340	それでもオーストラリア人……………
328	真相……………
314	カイの死……………
292	急変……………
268	きみが混血だとしたら？……………
260	ギービン収用か？……………
240	バナナの苗木……………
231	気になる態度……………
215	ギービンの改装、カイの看病……………
203	ダステイがかくそうとしたこと……………
190	まず手始めに……………
182	祖父を幸福にする計画……………

XXVII XXVI XXV

訳者あとがき.....	家 族.....	給 水 塔.....	リル は リル.....
382	376	371	355

青  
さ  
ぎ  
牧  
場





## I 父の死と、祖父との出会い

### I 父の死と、祖父との出会い

メルボルンには、明るい日差しがあふれていた。霧がたちこめた陰気な日、はだをさす風の日、うら悲しい雨の日が、冬とともに去り、また十一月(訳注―春のこと。南半球で)がやってきた。水色の空になん本もやわからかく灰色に浮き出た大寺院の塔。青葉きらめくあちこちの公園。全市街が日の光を浴びている。コリンズ通り(訳注―ヤラ川と平行に走る、メルボルン都心の目抜き通り)では、路上喫茶店にさまざまな色の大型パラソルが花開いていた。その近所にも明るい色彩がはねかえっているが、そこはジョナス果物店だ。

だが、スプリング通り(訳注―都心東方のはずれで、コリンズ通りに交わる)への町角を曲がると、弁護士事務所がはちの巣のように立ちならんでいて、そのほとんどは、季節が変わっても、まったく見かけが変わらない。

リルは、壁にくつつけて置かれたかたいいすにすわって待っていた。陰気な部屋だ。女学園の園長室とたいして変わらないわ、とリルは思った。旧式な机、赤いハンコの目立つ弁護士資格証明書を額縁に入れてかけてある仕切りの壁、ファイルを入れた整理戸棚、部厚い大きな本がつまったガラス戸つきの本箱。窓の下の棚には、いつものようにほこりが積もっているのが目についた。この十三年間というもの、毎年二度ずつ、リルはこのいすにすわってきたわけだが――いつもこの棚にはほこり



が積もっていたものだ。リルが六つで、字を書くことをおぼえたばかりのころ、一度その棚たなの上に指で自分の名前をたどたくしく書いてみたことがある。リル・メリウエザー。私立女学園小学部のアダムズ先生が、なんてはしたないことを、と顔をしかめながら、しみひとつないハンカチでその名前を消してしまったものだ。あれは、リルがラッシュトン私立女学園の一年生だったところのことだった。そこは、リルにとって初めてのほんとうの学校だった。そこへくる前はなん度か「保育園」を転てんとした。そこは、ベテランの保育母や退職した女教師たちが、小学校へいる前の子どもたちを預あづかりかかって、職業

的な微笑ひしょうを見せてその面倒めんどうをみる所だった。

リルが初めてこのいすにすわったときは、足が床からだいぶはなれていた。それどころか、足を前につき出してすわるのがやっとだった——その足にはじょうぶな茶色の短たんぐつがはかされていたが、よそ行きの簡素かんそな子ども服のすそから、ほとんどすぐにくつがのぞいているようなあんばいだった。この簡素かんそな服は、その後リルが身につける運命にあつたなん種類しゅるいもの制服せいふくの、いわばはしりだったのだ。いま、リルはブルーのチェックのスカートを見おろした。これがさいごの制服せいふくというわけだ。

「来週らいしゅうになったら」まるで敵てきに対するように制服せいふくに向かつて、心の中でつぶやいた。「来週らいしゅうになったら、おまえをズタズタにひきさいてやるからね！ つめ切りばさみで切りきざんで、それから——」

向こう側のドアが開いて、ハーバート氏——ハーバートリハロー事務じむ弁護士べんごし（訳注——法廷ほうてい弁護士の手助け、依頼人の法律書類ほうりつしゆり作成などにたずさわる）事務所の代表者格——がはいってきた。

氏もまた、リルを見て、この少女が初めて事務所にきて、いまと同じようにすわって待っていたときのことを思い出した。あのときのこの子は、ずいぶん小さいくせに、少しも物に動じない顔つきをしていたなあ。表情に、あの年ごろの子どもには不ふ似に合あいなきびしさがあつた。この少女といっしょに届いた手紙を読んだときの驚おどろきと困惑こんわくをも、氏は思い出した。その中で、ニューギニア（訳注）南東（部のパプア・ニューギニアは、一九四九年から一九七五年までオーストラリア領）にいる少女の父親ロバート・メリウエザーは、むすめの世話を氏の手にゆだねると伝えてきたのだ。

「私のむすめを」——手紙の文面はこうなっていた——「どこかのよい学校へ入れてやってください

い。その際、必要な物はすべてあたえ、授業料はきちんと支払しはらってくださるようお願いします」ハーバート氏の推測すいそくでは、この子の両親は離婚りこんしており、父親としてはニューギニアがむすめを育てるのにふさわしくないと見て、メルボルンへ送る決心をしたのではないか、ということだった。さらにまた、氏の察するところ、メリウエザー氏はなるべくむすめのことにかかずらいたくない、となると、むすめにはたよりになるような親しんせきも知り合いもなかったから、わずか三つで、ある程度ていどは一人で生きていかざるを得なかったのだ！

さいしょハーバート氏はこの依頼いらいを断わろうかと思つたが、けつきよく、あまり気のりしないままに、アマリリス(訳注—これを縮めてリルと呼ぶ)・ジェーン・メリウエザーの後見人になつたのである。

もちろん、どこの「よい学校」だつて、こんな幼い子どもを入れてはくれなかつた。初めの数週間、ハーバート夫妻がおもりをしたが、その結果、この子どもが一度も父親を恋しがらないのに気がついた。さびしがっているのかどうかも、よくわからない。ひどく無口で、がまん強かつた。そもそも、これまで子どもだつたことが一度もないようにさえ見えた。ハーバート氏がある保育園に入れてくれたので、リルはグループ活動と児童養育のシステムにしばらくられた生活を始めたわけだが、一度としてこれになじんだことがない。それ以後いご十三年間というもの、年に二度、ハーバート氏の事務所じむしょに向いては、この背せのまっすぐくないすに、腰こしをおろしてきた。そのあいだに足ものび、スカートもつぎからつぎへとギンガムやタータンチェックのウール地のものなどに変わつてきた。豊かな黒髪くろかみは、おさげから、やがては肩かたまでたれるポニーテールに変わった。顔の造作ぞうさくの中では、いくつになつても

緑色の目が人目をひいた。その顔もいくつになっても小さかったが、表情にはなにかしらこわいところがあった。

休暇中も寮に残っているのは、リルだけという状態がなん年もつづいた。だがこの少女は、持って生まれた性格の魅力ひとつで、手ごろなクラスメートに、自分を招待させるようにしむけるすべをおぼえた。場合によっては、しゅうとうな贈り物作戦によって目的をとげることもある。なにしろお金を使うことにかけては、ちっとも心配する必要がなかったのだ。そんなわけで、ずいぶん小さいころから、打算的で自己中心的（なにしろ自分のほかにだれがリルのことを考えてくれるというのだろうか？）になった——とはいっても、いちまつの愛きょうがなかったわけではない。ハーバート氏の知っているかぎりでは、リルの父親は年一通という最低ぎりぎりの回数しか手紙をよこさなかった——むすめの誕生日を祝う義務的なもので、リルはそれに短い返事を書いた。

リルは、礼儀作法の時間をずるけることができなかつたおかげで、必要とあれば行儀よくふるまうこともできた——そこでいま、いすから立ちあがるとハーバート氏のほうへおごそかに片手をさしおいた。氏はその手を取って、顔を見おろし、この子のなかにはひとかけらでも感情とか、心のはずみとかいうものがあるのだろうかと思ってみたが、けつきよく、よくわからなかつた。

氏の前には、ラッシュトン女学園のこざつぱりした制服をつけた、背の高い、棒のようにやせた少女が立っている。リルはよくクラスメートから直線の定義——「はばのない長さ」——にたとえられた。しかし、制帽のへりからのぞくつややかな黒い巻毛は、なんとなく優雅なおもむきがあったし、緑色



の目を持つ小作りの顔立ちも、どこことなく人の反発心をそそる、冷たい表情さえなければ、風変わりな美しさをたたえているといつてもいい、とハーバート氏は思った。

ふいにリルはにつこり笑った。奇妙なことに、氏はこの少女の笑うところを見た記憶がない。ちよつと意地悪そうなところはあるが、えくぼが出て、こちらの気持をほぐすような微笑だった。ハーバート氏はびっくりしたが、うれしい気もした。

そのとき、氏は、少女をここに呼んだ理由と、これから伝えなければならぬことがらとを思い出した。この少女が十三年たつて初めて人間らしい表情を浮かべたその日に、氏は少女の父親の死を伝え——遺書を読んでやらなければならなかったのだ。

またドアが開いて、事務員が別の人物を案

## I 父の死と、祖父との出会い

内してきた。リルはそちらに背中を向けていた。その人物は戸口につっ立ったまま、いかにも老人らしく、もの珍しげに部屋の中を見まわして、そこにいる者たちがなに者であるか見定めるのに手間どっていた。ハーバート氏は、リルの肩ごしに相手を観察した。

相手はばら色の顔をした、七十がらみのたくましそうな老人で、このいかにも裕福そうなとりすました事務所にはそぐわない着物の着方をしていた。この老人、つまりデービッド・メリウエザー氏は、当人の言う「よそ行き」なるものに着変えてはいたが、カラーもネクタイもないしまのシャツの上に着こんだ茶色の上着は、救世軍の慈善ぶくろから出てきた品物としか見えなかった。白いまゆ毛がピントつき出た顔は、ピンク色で、きちんとそりあげられている。なにしろ老人は、ここへくるためにめかしこんでいたのだ。長ぐつはみすぼらしいものだったが、その深い豊かなつやは、なん年もみがかなければ出てこないものだ。これこそデービッド・メリウエザー氏——仲間うちでは、ダステイ〔歌注——「ほこりだ  
らけの」という意味〕——が、ブーツというものはかくあるべしと考えている理想的な姿だったのだ。近ごろ流行のくつや砂漠用のブーツなどは、ダステイに言わせればくつではない。ダステイのほかの衣装がどんなに欠点だらけなものだろうと、このブーツだけはダステイの名譽を傷つけはしなかった。

「メリウエザーさんですか？」　ハーバート氏はリルの手をはなすと、新しい客のほうに向きなおった。ふと、むかしはこの老人の目はこの少女の目とそっくりだったにちがいない、という気がした。

「おかけになりませんか？」　弁護士がきいた。

ダステイは、ぎくしゃくといすに腰をおろした。



自分の姓が耳慣れぬ形で口にされるのを聞いたとたん、リルはさっと振り向いて、新しくはいつてきた人物を見つめた。ダステイのほうも、少女の顔を見すえたが、その目には奇妙な表情が浮かんでいた。老人の気持がしずまるのを待って、ハーバート氏が紹介を始めたときですら、ダステイはそれに耳を貸す様子もなく、じっとリルを見つめていたが、老齢のためにやや輪郭のくずれた顔には、さまざまないがかすめすぎているようだった。

「メリウエザーさん」 弁護士が切り出した。「お知り合いになれてうれしいです。もうお聞きおよびと思いますが、あの——ご不幸のあったことを」

「ああ」 老人が言った。

「これまでご面識を得ていなくて残念です。おわかりでしょうが、メリ——わたしの依頼人——つまり、あなたのご子息ですな——あの方は一度もおっしゃらなかったもんで——エヘン。さて、この若いご婦人ですが——ご紹介いたしますと——」

「リルだね」

名前を言ったのは、当の老人だった。ほとんど夢遊病者のように、ぼそつとした声だった。ハーバート氏は目を見張った。

「そのとおりです。アマリスさんですよ。でも、お孫さんには一度も会っておられないはずですか？」

「ああ、一度もな」